２０２０年１２月　　関東学院六浦こども園

みちしるべ

みずからのために道しるべを置き みずからのために標柱をたてよ （エレミヤ３１：２１）

人になれ　奉仕せよ

聖　句	：今日、ダビデの町であなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシヤである。 （ルカによる福音書　2:１１）
保育目標：０歳児	・クリスマスの雰囲気を感じる。冬の自然に触れる。
１歳児	・クリスマスの雰囲気を感じ、喜んで過ごす。
２歳児	・クリスマスの雰囲気を感じ、楽しみに待つ。
３歳児	・クリスマスの喜びをみんなで祝う。
４歳児	・クリスマスの話をみんなで聞き喜んで迎える。
５歳児	・イエス様のご降誕を喜び合う。　　・受ける喜びを経験する。

先日のお父さんの会で、園舎にイルミネーションの飾りがつけられました。お忙しい中ありがとうございました。点灯式では讃美歌を歌い、みことばを読み、灯りがともされたその瞬間「うわ～。」との歓声があがりました。キラキラと輝く
イルミネーションは、私達大人にとっても、もちろんこども達にとっても、見ていて心ワクワク踊る気持ちになります。今年も、クリスマスが迎えられる喜びを感じながらアドベントを過ごしていきたいと思います。

園庭で、照沼先生（関東学院大学で造形を教えて下さり、こども園にも月に４～５回、こども達と一緒に造形活動をしていただいています。）がアトリエ活動の準備をしていると、「何してるの！」「やりたい！」と素材を見ただけでこども達は心ワクワクする姿が見られます。自分で使いたい道具や素材を手に取り、早速始めるこども達。最近は専ら「泡作り」ブーム。石鹸を水でふやかした液体を泡だて器で必死にかき混ぜる真剣な眼差し。ある程度泡がたってきたところに、赤・青・黄色の絵の具を手に取り投入しかき混ぜます。白い泡が赤や青・黄色に変化していく様子を見ながら、色々な色を作り始めます。それはまるで、科学者のようです。「見て」「感じて」「考えて」「決めて」「動かして」と、こども達は頭の中で創造し、試行錯誤しながら取り組んでいます。そんな姿を横で見ている乳児クラスのこども達。幼児のこども達が取り組んでいる姿をじっと見つめ、そこから、沢山の事を「感じ」「学び」「真似」していきます。園庭アトリエは素材だけではなく、「乳児から幼児までのこども達が出会う場所」でもあります。。先日のアトリエで幼児のこども達が泡作りをしていました。同じことをしたく、ボールに石鹸水を入れ筆でかき混ぜる１歳児女子達。黙々と真剣な眼差しでグルグルとかき混ぜることに集中。混ぜることに満足したと思ったら、目の前の絵の具をボールの中へ。赤や青、黄色と好きな色をどんどん入れて夢中でかき混ぜていました。筆で混ぜているので、もちろん手にもつきます。すると、筆から手に代え、かき混ぜ始めました。絵の具だけではない、泡の絵の具の感触はまた違った味わいだったのでしょう。ボールの中に両手をいれ、敷いてあった丸い段ボールの上に大きく輪を描くようにグルグルと。まるで平泳ぎの手の動きのようでした。自分の手で、段ボール上の色が混ざっていく様子をじっと見ながら気持ちよさそうに手を動かしていました。次第に段ボールから自分の頬に…泡絵の具でお化粧。笑顔で嬉しそうに頬を手で撫でていました。どんな事を感じているのだろう…、冷んやりかな、ヌルヌル感かな…思いをめぐらしていました。
レイチェル・カールソンの『センス・オブ・ワンダー』の中で、「*私はこどもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭をなやませている親にとっても、「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。こども達が出会う事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、様々な情緒やゆたかな感受性は、この種子を育む肥沃な土壌です。幼いこども時代は、この土壌を耕すときです。美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感激、思いやり、憐み、賛嘆や愛情などの様々な形の感情がひとたび呼び覚まされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになります。そのようにして見つけ出した知識は、しっかりと身につきます。*」と。アトリエで出会う、未知の世界。五感を通して、そこで感じる感覚や感激が生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー」になっていくことを願っています。

副園長　松下　成美